



蛙 鳴 く 聲

永代美知代

『もうあと何里だい、君？』

薫は又しても斯う、口に出して訊かないでは居られない。

『ナニもう直さてす』

車夫は度々の事にもう振り返りもしない。相變らず白い布を被せた饅頭笠を振り立てながら、烈しい眞夏の日光に白く光つた道を何處までも眞直に走つて行く。涼しい音を立て、流れる水や、降るやうに鳴く林の中の蟬の聲を喜んで、珍らしい最初の中で、片時も早く志す人の家に落着き度い願ひの薫の眼には、珍らしい筈の田舎の景色を、味つて眺めたりして居る餘裕は無い。それ處か、一

向に變化の無い川沿の、片々に同じやうな形の山ばかりひかへた單調な道は、けつく疝性な蕪を焦立せた。

『もう直さくつて、君は先刻から云ひ續けてるが、あれからもう何里来たか知れやしませんぜ!』
不機嫌な叱りつけるやうな蕪の調子に、車夫は一寸と立止つた、が直ぐ又普通通足に曳いて歩いた。

『ナニもう直ぐです』

『僕アそのもう直ぐですが嫌なんだ。そんな氣安めばかり言はないで、もつとはつきり、あと何里と本當を云つて聞かして呉れたまへ』

『何里も蕪もあるもんですか、ハッハッハッ旦那初めての道云ふものア、兎角遠いやうに思へるんもんですよ』

蕪は怒つて、車夫の脊を睨みつけたまへ、返事をしなかつた。

『旦那は川面の何處へおいてなさるんですりア?』

『土井』

蕪がぶつきら棒に云ひ切ると、車夫は急に親しげな容子を見せた。

『旦那は若しや大阪からおいてた若ぢやありませんか』

『えいさう——』

蕪はドギマギ生返事をするのであつた。

『實は私ア土井の奥さんをよくお乗せ申しますんでナ、此間もあなた、奥さんが神戸の女學校からお

歸りの時、私がお供をしましたたが、その時のお話に、何でも此夏休み中に大阪の御親類から若が一人おいてる筈ぢやけい、よろしく頼む云ふてからにナ、旦那はあの奥さんの甥御で御座りやんせう?奥さんは全くよく出来た方で、大抵な男が傍へも寄りつくりやしません、女御の身空で女學校の先生をなさつとる程の學問があるんぢやに、些少もそれを鼻に掛けるでも無い、まことに見るからに女らしい、しとやかな方で御座りやんすよのう、それに又お嬢さんが感心な——お母さんのお留守の間お年も行かんのによろお老人衆の面倒を見てあげなさるさうなが、矢張り奥さんのしつけが善いせいでありやせうよ』

聞いてる間に蕪は、紅のやうに顔を染めた。まさか車夫風情の者に、土井家と自分との關係が小母の口から、打明けて話されて居やうとは思はぬけれど、何彼と事情を知つて居さうに考へられる。蕪は理由もなく恥かしい氣がして、無性に體が騒いだ。

『どんな娘かしら?』

蕪は妙に懐しいやうな、早く逢つて見度いやうな氣がして、寫眞でよく知つて居る心持ち面長な、眉の濃い切の長い眼つきの小母によく似た縫子の顔が、眼前にちらついては、ぼうとなりくする。

『僕は如何かして居るよ』

自グでも不思議な程縫子の事が考へられる。實際の處蕪はついぞこれまで許婚の縫子の事なんぞ考へても見なかつた。二週間の著中休暇を待ち詫びて、狂人のやうにこの備後を戀しがつたのも、全くは小母に逢ひ度いからの事である。

薫は一週間と小母に逢はないでは辛抱が出来なかつた。以前神戸の銀行に見習ひを勤めて居る時分には、毎日のやうに小母の學校を訪ねたものだ。小母と云つても無論肉親の伯母でも何でも無い。全くの他人なのだが、教會が同じで、薫が善良な日曜學校の生徒であつた關係から、つい愛されるやうになつて、始終行き來をしては、菓子を買つたり、着物のほころびを縫つて貰つたり、早くに母を亡くした薫は何時とも無く小母と呼んで慕ふやうになつたのである。

『薫さん、あなた私の本當の息子になつて呉れませんか』

斯う折入つたやうに小母が口を切つた。それは學校の庭一杯櫻の花が咲いて、パンデーや沈丁花の香ゆかしい頃であつた。二人は並んで東屋に腰掛けた。遙かの音楽館からスウィートな音調が流れるやうに傳はつた。

薫は眼を丸くして、不思議さうに小母の顔を見つめた。

『私にはね、今年十四になる娘がありますの、可哀さうな父親も無い、兄も姉も妹も無い不仕合せな娘がありますの』

斯う云つて身の上話を始めた小母の悲しい容子を思ひ出すと、薫は何時でもほろりとして泣かされた。

小母は若い時分に婿を迎へた。そして二人の仲に縫子が生れたのだが、婿と云ふのが舅と氣が合はなくて放蕩を始める、公金を費ひ込む。そんなことで離縁になつて、今では何處に如何して居るのか解らない。人の噂に臺灣に居るとか、さうした事を聞いた事もあつたが、それも久しい以前の話で、

兎に角娘は非常に手頼無い身の上である。勝氣な人ではあるが、祖父も最う取る年で、何時大事があるかも知れない。あとに残る者は女子供の、譯の分らぬ者ばかりで、考へれば考へる程心細い。如何かして善い兄分を見つけて、婿を定めて置き度いものだと言ふのである。薫は聞いて居て、全く可哀相になつて堪らなかつた。

『僕でもよかつたら、屹度その娘の、お縫さんの力になりませう』

斯うして縫子は薫の許婚と定つたのである。それから一年経つた。母に離れてたつた一人、遠い備後の山に、老人達の手に育てられて居る縫子から二度手紙が來た。幼い手跡で、誰かから勧められて教はつたまゝを書いたらしい文句が認められた。それを讀む薫も矢張りボンチ育ちの少年で、妹と云つた感情以上、許婚の女などと、さうした事を考へもしなかつた。そして只矢鱈に母のやうな氣のする小母が懐しかつた。

正月頃から大阪詰めになつた薫は、實家に歸つて、父の許から通勤する喜びよりも、小母に別れて神戸の地を去らねばならぬ悲しみに胸をつかれた。仕方無しに大阪へ歸つた後は、一週に一度の日曜日を樂しんで、二人はよく須磨から住吉の間を遊んで歩いた。

『カオルキウビヨウ、スグコイ』

日曜日が待ち切れなくなると、薫は銀行の歸りに、斯うした電報を小母に送つた事もある。正直な小母は眼を泣きはらして飛んで來た。

『あゝまあよかつた事！』

斯う云つて小母は、ほつとしたらしく胸を撫でくした。薫は斯うした場合の小母の容子を、どんなに興ある事に思つたらう。それ程までに自分の上を案じて、自分一人の爲めに、全く死ぬ程心を痛めて居て呉れる者があるかと思ふと、薫は嬉しさ誇しさに身内がどくどくするのであつた。そして濟まないと思はぬ譯ではないのだが、別れて居て遺瀨無い程淋しい氣持ちになると、悪いと知りながらついゝろんな手段を以て小母を呼び寄せた。

『急病だ、危篤だと、餘りそんな嘘ばかりお吐きだと、しまひに私も頓着しなくなりませう』
 到頭小母から斯う云ひ渡された。如何かして小母の心をしつくり、自分に引きつけ度い、薫は色々考へ悩んだすゑに、思ひ切つた手紙を出して見た。その手紙には、少々思ふ仔細があつて、縫子との關係を断ち度いから、そのつもりで居て貰ひ度いと云ふ意味が、極めて簡単に認められた。
 丁度宵から烈しい暴風になつて、折角の櫻花も何も叩き散した四月の夜の、十二時過ぎた時分である。ふと薫が眼を覺して見ると、ドシヤ降りの雨の音に入り交つて、どうやら表の戸を叩くやうな氣合がする。

『小母だ！』

むつくり飛び起さると、急いでどてらの上に三尺帯を止めながら梯子を下りた薫は、戸を開けて又胸を踊らした。其處には小母がしょんぼり、寒さうに雨に濡れて立つて居る。

『薫さん！』

悲しい、物哀れな聲で、袴と薫の手を執つた。薫も思はず泣き出しさうになつて唇を噛んだ。黙

つて先に立つて歩き始めると、小母は戸を引き寄せて、可憐に鍵をかけて後に續いた。

一足先きに梯子を上つた薫が火鉢の火をかき立て、居ると、小母は突然其處へ泣き伏した。

薫は小母のこの容子さへ見ればそれで澤山なのである。それなのに小母はまだ斯うした事を心から思ひ込んだ調子で云ひ續けた。

『薫さん、何故あんな悲しい事を云つて寄越すんです？あなたに見捨てられた私達母子は如何しやう様も無いぢやありませんか、薫さん、頼む、頼む、私達母子を可哀さうだと思つて、もうそんな事は云はないで下さい！』

斯うした事があつて以來、小母は前にも増して薫の機嫌を取つた。學校の方の都合を無理からつけて、小母は薫の呼び出し手紙の來ない前に、此方から出掛けて來るやうにもした。だがその内に夏休みが來て、小母は是非其郷里の老人達を見舞はねばならなくなつた。大阪から毎日のやうに懐しげな手紙が來るのを幸に、小母は薫を呼び寄せた。許婚の仲だと云ふばかりで、まだ顔を合した事もない二人を、自分の監督の下に親しく近づけて置き度い、小母の願ひであつた。

『此橋からが川面分でありやんす。彼處の山の下に白壁の堀が見えませう、あれが土井さんの邸で御座りやんす』

突然に斯う車夫から聲を掛けられた薫は、ハツとするとグラグラと眩暈がするやうに感じた。

『愈々來たか！』

動悸が馬鹿に高まつて、自分ながら可笑い程胸が騒いだ。

『あゝあ堪らんく！』
 ごろりと横になつて何かを考へて居た薫は、ついと飛び起きて油汗ににじんだ體を、大きなタオルでやけに拭き廻した。

『こんな暑苦しい部屋つたら、大阪にだつてめつた有りやアせんわい、人を失敬な、何と思つてんだい、終日こんな處に打棄つときやがつて、俺ア何の爲めに來たんだ馬鹿々々しい、一年一度二週間より無い大事な夏休みぢや無いか、畜生！』

自分の部屋に當てがはれた天井の低い二階の六疊の間の、おまけに窓と云つたら大きくてもある事か、甚く腰高な風通しの悪い、立ちてもしなければ碌すつぽ外の景色も見られぬやうな、小さき窓で朝から晩まで三度の食事時の外、家の人達とめつたに顔を合すやうな事も無く、終日薄暗い部屋の壁を睨めて暮らさねばならぬ薫は考へれば考へる程、ぢり／＼不平がこみ上げて腹が立つ。

『備後へ行つたら小母と一緒に、終日面白く遊ばれる！』

斯う樂しんで來た薫の第一の希望からして崩された。

家の近間で車を下りた薫が、車夫に行李を擔がせながら、もろこし畑の間の小徑を傳つて行く、何も知らないで洗濯物を取り入れて居た襦袢がけの小母が、

『まあ薫さん！』

と筒抜けした聲で呼び掛けた。

『小母さん！』

薫は駆け寄つて、小兒のやうにすがり着いた。

『よく來て呉れました。そりやアね、どんなに待つてたか知れないの！』

二人は涙の湧き出る眼を見合つて微笑んだ。

『こむねや、大阪の客人かのし』

ふと見返ると、腰の曲つた眼くされの、小汚い婆さんが立つて居た。すると小母は周章たやうに薫の傍を離れた。

『お祖母さん、薫さんが來ましたから、早くお祖父さんにさう云つて下さいな。縫子は何處に行きましたかしら？』

『さうよのう、早う皆なに知らせて喜ばせざるまい』

よちよち祖母が家へ入つて行く後姿を見送ると、小母は囁くやうな小聲で口早に云ふのであつた。

『田舎はね、何彼がうるさいからその積りてね、氣に入らなくても辛抱して頂戴な！』

小母の言葉の意味が、薫にはよく解らなかつた。

その晩寢床を延べて、蚊帳を吊ると、小母は階下から澤山な古本を持つて來た。

『珍らしいでせう、鳥羽繪の本だの何だの、いろんなものがありますよ。あなたに見せようと思つて、此間わざ／＼縫子にさう云つて、倉から出させて置きましたの。明日から怠屈さましに一寸一寸御覽

なさいな』

『全く面白さうですね』

薫が本を取り上げて二三枚展げかゝると、小母は立ち上つた。

『ではおやすみなさい、お疲れてせう』

『ねえ小母さん』

薫が呼び止めると、小母は一寸と立止まつて莞爾した。

『何よ？』

『お忙しいの？もつと居て呉れませんか』

『お話なら又々！今夜はもうおやすみなさい、あなたも旅疲れをなほさなくちや、ね、おやすみなさい』

い

斯う云つて、ずん／＼梯子を下りて行つて了つた。

翌る朝の食事が済んでから、薫は祖母と一緒に勝手元を取り片づける小母の手のあくの待ちなが

ら、家のぐるりを一週り廻つて來た。

『小母さんまだ？』

待ち兼ねて薫は水口から呼んで見た。

『ほ／＼ほ淋しいの？縫子と一緒に裏山へでも出掛けちや如何、小母さんはね、今日は洗濯物が忙が

しくつて、お祖母さんの相手になつて、のりつけを引張らなけりやならないの——縫子や、縫子や、

早く兄さんの傍へおいてなさい』

『僕ア山へは行きません！』

云ひ捨てゝぶいと二階へ上つた。部屋の中を彼方から此方へ行つたり來たりしながらも、薫は梯子

段を氣にして、それとなく覗いて見た。だが何時まで待つても小母の姿は見えなかつた。

『如何したんだらう？』

薫は勝手が違つて、猶更ら焦立つて來た。何時もは一寸と不機嫌らしい容子を見ただけでも、散々

氣を揉んで心配する癖に、あれ程怒つて居るのが解つて居ながら、知らないふりをして顔も出さない。

『わざ／＼人を呼び寄せて置いて、洗濯物が忙がしいものないものだ』

ぶり／＼して居る處へ、縫子が梯子段の中段から顔だけ出した。

『兄さん御飯です』

寫眞で見たり、薫が想像して居た顔とは大違ひの、色の眞黒い田舎の娘である。

『僕アこれから大阪に歸らうかと思つてゐるんです、小母さんにさう云つて呉れ給へ』

『何故？まあ！』

『だつてお邪魔だからね、小母さんは洗濯物で忙しいさうぢやないか』

『……………』

あど／＼して返事もし得ない縫子を見て居ると、薫は十五にもなつて、何て間拔だかうと、腹が立つて來る。

「歸るの何のと冗談ばかり云はないで、早く下りて御飯をおあがりよ、可哀相に縫子が泣きかゝつてるぢやありませんか」

云ひながら小母は上つて来て、薫の手を引張つた。

「冗談ぢやない、僕ア本當に歸らして貰ひます」

「何を云つてゐる此人は！來たばかりで歸る人があるもんですか、サアサア一緒に御飯にしませうてば！」

「嫌だ」

「相變らずボンチだねえ、忙がしくして居て悪いけれど、それは又後でよくお話しするから、どうぞ機嫌を直して小母さんに安心させて頂戴な、ねえ薫さん、時間が絶つと又階下で變に思ふといけないからさ、後生！」

頼むやうな小母の眼色を見ると、薫は手も無く折れて了つた。無論小母から機嫌をとつて貰ひ度いばかりで、最初から歸る意志は無いのである。

だが小母はその午後、まさかと思つた夜まで糸車を廻して、到頭二階へ上つては來なかつた。

その翌日も、その翌日も、薫はまる三日三晩を誰一人話し相手も無く、牢屋のやうな二階に閉籠つて、繪本を見た。照り續く八月のお天氣に瓦が焼けて、蒸すやうに暑苦しい。

「小母さん、一寸と来て下さい！」
堪らなくなつて、薫は階下へ怒鳴つて下りた。

「何か御用？」

振り返つた小母は、眼を血走らせた薫の疥癩面が氣になつた。祖母と二人糸車を並べて臺所の廣い板場で、手引の絹糸へ燃をかけて居るのである。祖母は此場の様子におかまひも無く、相變らず手も休めずに車を廻した。プーン、プウン、プウンと斯う氣怠さうな、人を馬鹿にしたやうな音を聞かされると、薫は餘計無遮苦遮した。

「用が無さや呼びやしません！」

「ぢや今行くからね」

なだめるやうな眼を薫に向けて置いて、小母は車の紡錘へ糸の端を引懸けた。その間に薫は二階に駆け上ると、急いで帽子を冠つて下りて來た。丁度梯子段の傍で出合つた小母は呆れて眼を腫つた。

「ぢや失敬、僕ア歸りますから」

「薫さん、そりや餘り甚い」

怨めし氣な調子で小母は止めかゝつた。それを無理から振り離して薫は下駄を突かけるが早い、表を差して走り出た。家の者へ氣を兼ねながら、小母も續いて駆けた。後ろを振り返つた薫は又一散に走つて、もろこし畑の陰に姿を隠して了つた。

「薫さん、薫さん！」

小母はあへぐやうに呼び立てた。

街道への出口の小徑の端に、こんもりと繁つた柿の木がある。傍に道しるべの石碑が立つて、旅人の休み場所に相當な高さの御影石が一つ横はつた。薫はそれに腰掛けて、狂人のやうな眼を光らせながら追手を待つた、息を切らして、せか／＼轉がるやうに驅けて來る小母の姿を見つけると、薫は思はずニヤリと微笑だ。

『到頭來をつた！』

斯う勝利の聲を擧げたが、素知らぬさまに、くるりと背を向け變えた。

『薫さん／＼、まあ／＼如何したもんぢや？そんなにせんでもよからうに！』

小母はあど／＼しながら、如何にかして機嫌を取らうとあせつたが、薫は身動き一つしないやうに力んで見せた。

『私にはあなたの怒つて居る事もよく解つて居ます、だけれどもね、それには色々理由があつて、此間の晩も一寸と話した通り、田舎は都會と違つて、そりやア何彼が面倒臭いの。だから二階へ行き度いと思ひながら、つい行けなくもなる譯で、ね解つたてせう、え薫さん？』

『解りました、だから僕が歸つて行きさへすれア、それでお終ひやありませんか、イヤどうも飛んだ御苦勞を掛けました』

薫はデロリと意地の悪い眼付で睨んだ。

『又初つた！何故あなたはさうなんだらうねえ』

小母は困つたらしく眉を寄せたが、それでも優しく痛はるやうな調子で云ひかけた。

『小母さんが悪かつた。歳の行かない人にこんな話をするでも無いと思つて、事情を話さなかつたら、くだらん誤解をさせました。實はね薫さん、あなたに聞かしたら吃驚する程色んな事情がありま

すの、怒らないで音無しに聞いて呉れますか』

話して居るうちに、薫の容子は何時とも無く、幾らか穏かになつてゐた。小母は漸くホットとしたやうに汗を入れながら、柿の木蔭へ寄つて、薫の傍に並んで腰掛けた。

『實はね、妙な噂があるさうでね——私もついこの四五日前、あなたが大阪を發つ前の日頃に聞いたのだが、私達二人は妙に思はれてるらしいんですもの』

『妙につて如何？』

『變に疑つてゐるんてせう』

云ひながら小母は眼を伏せて膝の上を見入つた。三十越した年増とは思はれぬ程、ほんのり顔を赫らめて、極り悪げな態は、如何にもこの人の女らしさしとやかさを偲ばせた。

『こむねや、分家の姉御が妙な事を話したがや』

祖母から斯う切り出された時の情無さ、小母は思ひ出しても氣恥かしい氣がするのである。それは分家の伯母夫婦が村の誰彼と一緒に、この春京詣をした時分の事である。丁度學校の休暇中なのを

幸に、小母は案内の役を頼まれて、大阪へも見物に連れ立つた。未来の婿の家と云つた關係から、薰父子の勸めるまゝに、小母は一同を連れて一晚厄介になる事にした。と折柄他からも泊り客が来て手狭な住家は、小母達五人の者が二階の薰の部屋と定められた一間に寝なければならなかつた。何の氣もなく並へて敷いた寢床に、小母は薰と隣合つて眠つた。

『こむねさんに限つて、そんな事も無からうが、あれも久しい間の夫婦暮しぢやけい、若しやがあるまいもんでも無い云ふてナ、一緒に行つた或る仁が私に話したが、縫子に嫁す云ふても、まだ中々間のある事ぢやに、早うから氣う急いて取り定めたもんぢやのし』

伯母は評判の口悪家て、誰の事でもよくは云ひたがらぬ女である。無論京詣りの連中の口から出たと云ふのは作へ事て嘘なのに定つては居るが、假りにも斯うした事を云はれて、それを又、現在の母たる祖母から自分に傳へられたと云ふ事が、堪らなく心外に感じられるのであつた。

だがさうした不快な、込み入つた事まで薰の耳に入れ度くない。小母はたゞこれだけ云つた。

『この春あなたの家に泊つたでせう、あの時の連中が、私とあなたと餘り親し過ぎるつてね、妙にやらんだ事を云つたとかで、祖母さんが馬鹿にして居るんです。だからね、餘り仲の善いところを見せても悪いと思つて、それで遠慮をしてるんですよ』

『馬鹿な！』

吐き出すやうに云ひ捨てた。

『何を遠慮がいるもんですか、親子だもの、仲の善いのは當り前ぢやないか』



「だけでもね、少しは世間と云ふものも考へなくちや」
 「考へる？何をでせう？馬鹿な事を疑ふ奴ア疑ふ奴が悪いんだ。小母さん僕等二人は、お互に俯仰天地に恥ずぢやありませんか、よろしい、僕ア決して遠慮なんかしませんよ」

「だつて——」

「何がだつてです、小母さんは氣が弱いから不可ないんだ」

「私が悪るかつた」

「蒸の元氣に引き變へて、小母は情氣込んで考へた。」

「もう少し早くその噂が私の耳に入つて居たらよかつたのに！何しろもう手紙を送つたつて間に合はな

いと思つたもんだから……」

「ぢや僕が來ちや悪かつたと云ふんですね」

「蒸は又額に太い青筋を立てた。」

「すぐそんなに怒つて、まあ／＼氣を静めて頂載てば！」

「だつて餘り失敬だよ小母さん、そんな位なら何故電報でも寄越して呉れなかつたのです、人をわざわざ來させて置いて——來るなと言さう云つて呉りやア、僕だつて何も邪魔にされになんぞ來やしないんだ」

「私が悪かつた」

「ナニ小母さんが悪かないてせうさ、僕が、僕が野呂間だから馬鹿にもされるんだ！」

「又そんな——」

「云ひさして小母は袂からハンケチを取り出して、そつと涙をおさえた。蒸は見ぬふりをして、横目にそれを盗み見るのであつた。」

「二人共最う戻らんかい、この暑いにお宮へても詣らはつたかのし？」

「今朝方府中の町迄買物に出掛けた祖父が、差しかけた毛縴子張りの蝙蝠傘の柄の端に籠をぶらさげて、歸りながら斯う聲をかけた。」

「まあお祖父さん、大層お早かつたぢやありませんか」

「急いでハンケチで顔中を撫て廻しながら、小母は汗を拭ふて居たらしくまぎらした。」

「町に行つても、この暑さぢやて善い魚が無えわい、どうかしてお客様にあげたいと思ふし、いかい事骨を折つたが、見んされ、こげん魚しか無いんだ！」

「ドレドレ」小母はわざ／＼立つて籠の中を差覗いたが『でもせいごぢやありませんか、よくねえを

れども』

「ウン、期節ぢやてのう、如何がなしてすいさう買はう思ふたんぢやが、無かつたてや、まあ一寸と覗いて見んさい、それでもどげん事骨う折つたか知れませんぞ」

「蒸は嫌々ながらお愛想に覗いて見た。」

「何んだ大阪の魚屋で買つたら、一つ三錢つもしやしない！」

「斯う口に出して怒鳴つてやり度い程腹が立つ。」

『明後日は府中の町の市日ぢやけい、俺が出掛けて行つて魚ア買ふて来てあげますけん、まあ其内御馳走しますけん』

云ひ續けた祖父の言葉を考へると、薫は猶更ら疳に障えた。

『薫爺奴！何處まで人を馬鹿にするつもりだらう、恐しく何彼を思に着せやがる！』

薫は着いた翌る日の事まで一緒に思ひ出した。祖父は朝から薫と顔を見合すたんびに、散々晩の御馳走の前振れをして置いた。そしてお膳に坐つて見ると、鹽焼の鮎がたつた二尾だけ、向ふ皿につけられて居た。

『どうてがんです？大阪ぢやめつた食はれん珍物でござんせうがい』

斯う祖父は抜け残りの黄色い前歯を見せて笑つた。幾ら田舎者でも餘りだ、ものの云ひ方を知らないにも程があると思つて、薫はその時から、祖父に對して好い感情を持たなかつた。

『如何した？お嫌かのし？』

祖母が傍から不思議さうに聞くと、薫は黙つて首肯しながら、わざとに鮎へは一箸もつけなかつた。

四

『頼む、頼む！』

斯う眼に云はせて、小母は手を合せた。ともすれば一人すり抜けて行きさうにする薫を、無理と引き止めて、三人一緒に歸らうとするのである。何にも知らない祖父は先きに立つて歩きながら、頻りに話をしかけた。

『薫さんは川魚が嫌云ふ事ぢやが、それぢや鯉も食はさつしやらんかのし？』

『えゝ』

『食はさつしやらんの？やればはれ、家には大きな奴うかこふとつたに！あれの洗ひも甘味いが、味噌汁が又何とも云へん、うまいがのう、如何ぢやナ一つ食ふて見さんせ、若い者アそんげな食はず嫌ひなんぞするもんで無え、のうこむね、汝も勸めて見さんせ』

『えゝすけども全く嫌なんぞせう』

小母はそつと薫のしかみ顔を盗むやうに見た。

『それが不可ん云ふ事よ、食ひもせんで好きも嫌ひも解るもんで無え。のう薫さん、今晚はこのせいごがあるけん何ぢやが、明日にも私が一つ料理うしてあげうわい。まあためしに食うて見さんせや、のう薫さん』

薫は返事をしなかつた。

『返事の無いのは嫌かのし？』

それでも矢張り薫は黙つてゐた。

『薫さんは先刻から齒が痛うてナ、言う云ふと風が入つて痛むからね、お祖父さん』
とりなして置いて、小母は又横からちらりと薫の顔を見た。

『やればはれ、虫齒かのし？』

振り返つた祖父は、苦り切つた薫の容子を氣の毒げに見入つたが、直ぐ又すたく歩き初めた。
『若いに齒が痛いたア、やつぱり甘いものを食ひ過ぎたんぢやうわい、私等見さんせ、五十越した
後になつて、やつと齒を病み出したんぢやに』

『お祖父さんは特別ですわ』

小母は又しても薫の容子を見い云つた。薫は殊更ら足に力を入れて、ドシンドシン音を立てながら歩いた。

『こむね、腐ると悪いで、早う腹だけ開けとけい』

祖父は籠を渡して家の中へ入つて行つた。小母は何にも云はず受取つた籠を持つて、井戸端へ寄ると、水を釣つてザアザア掛けた。

『見るのも癪だ、捨てて了へ！』

云ふより早く薫は突然引たくつて、籠から魚を掴み出して地の上へ投げつけた。

『まあ薫さんは！』

流石に小母も呆れ返つた。

『何だこんなもの！』

有る丈けの魚を一つ残らず、掴んでは投げ投げするのである。

『まあ本當に如何したつて云ふの、あなたは？』

小母は泣きさうな容子をして四周を見廻したが、人の來ないうちにと、急いで土を拂ひ落しながら、

拾ひ集めた。無言のまゝ勝手に立つて摺鉢を持つて來ると、又水を汲んで洗つた。

『何が氣に入らんでさうなさるの？』

涙ぐんだ眼をあげて薫を見詰めた。

『小母さん、大抵に馬鹿になさい、へん面白くもない！』

云ひ捨てると一緒に、薫は駆け出した。

『又まあ何處へ行くの？』

小母は手早く猫のかゝらぬやうに、井戸端の流しの上に魚をあげて、上から摺鉢を倒して覆つて置く
と、一目散に跡を追ふた。息を切らして、暫く立ち止つた小母が四周を見廻すと、薫は裏の墓場の石
塔の蔭から、そつと顔を出して此方を覗いた。

『まあ本當に！大抵にお勘ねなさいよ』

小母は莞爾笑つて見せた。薫の方でも一寸と笑顔になりかゝつたやうなので、急いで其方へ寄つて
行くと、つい間近の傍まで來た處で、ひよいと薫が立つて、又駆け出した。

『冗談ぢやない、薫さん、本當にもうよして頂戴よ』

云ひながらも、せか／＼薫を追かけて、二人は石塔を間にはさんで、へと／＼になるまで走り廻
つた。

『汝達アまあ、見とも無いでねえかよ、何ぼの歳になつて、鬼ごつこうしとるんかのし？』
ふと氣がついて見ると、嚴しい顔付をした祖母が此方を見守りながら立つて居る。二人は極りの惡

い眼と眼を見合せたが、小母は祖母の手前を何と云つて誤間化したものかと、思案に暮れて、亦くなく俯向いた。その間に薫は肩を振つて家の方へ歸つて行つた。

『あら薫さんは？』

小母が心配らしい眼をあげると、

『何處へ行くもんか、汝が餘り氣を揉むけん、餘計心配させられるんぢやがい』

と祖母は忌々し氣に云ふのであつた。

『あの兒ア如何かしとるんぢやないかのし？一體歳ア何ぼぢやつたかいのし？』

『十八になつたのですけれど』

小母は祖母の容子を窺ふやうにして、つぶやくやうな小聲で云つた。

『お祖父さんの話に聞いたが、齒が痛いさうぢやのし、親知らずでも生えかゝつとるんで無からうかのし？たら些少ばかり氣が荒立つて、疳癪の立つもんぢやが』

『さうなんですすよ、だから本當に困りますの、矢張り齒のせいで焦々してるんですすよ』

小母は先刻祖父の手前をつくらうため、口から出まかせの嘘を吐いて、薫が齒を病んで居る事に置いて置いたのを幸に、此處でも斯うそれと無しに薫をかばつた。

『それにしても餘りて無いかのし、嫌なら嫌で、何も魚ア投げんでも好からうに！お祖父さんがこの暑いに、遠い道をわざ／＼出掛けて行つて買ふて御座つた親切を思ふたら、怪我の罰にも、あんげな眞似の出来る事で無からうぞのし』

祖母が口惜しげに口説くのを聞くと、小母は身を切られるやうな思ひをした。黙つて俯向いたまゝ、ついほろりと涙をこぼした。

『阿母さん、あの、兄さんが一寸と来て下さいつて、さう云ひなされますよ』

縫子が心配らしい容子をして驅けて來た。

『何處に居て？』

『二階にお居てるんぢやがナ早う阿母さんに來て下さいつて、私に呼んで來い云て命令なんしたの』

『どげん風なら？』

祖母が訊いた。

『どげん風云て、一寸と云へりやしませんかナ、何ぢや怒つて居なさるやうぢやつた』

『怒つてや？』

『ぢやけんども祖母さん、私にやよう解らざつたがナ』

縫子は母と祖母との顔色を見比べながら、もじもじ立つた。

『兎もあれ行つて見て來なせ、遅くなると又疳を立てうぞ、私アもう見るのも怒いが、のう縫子、

汝ア恐ろしうも無いかや？』

縫子は黙つて俯向いた。

『私ア考へると行末が案じられる！』

投げ出したやうに云ひ放した祖母は、術無げに涙ぐんだ小母の眼元を、齒痒さうに見守つた。

『又疳を立てうに、行つて来て見なんせてや！』
祖母の言葉は荒かつた。縫子が呆れたやうに眼を睜ると、泣きめ立つた小母は急いで顔をそむけるのであつた。

五

二階へ上つて見ると、新しい白緋の浴衣に着代えた薫は、茶色の皮の旅カバンを傍に引き寄せて坐つて居た。恐ろしく眼尻を引釣らせて、唇の端をビクリビクリ痙攣的に動かした。

『薫さん！』

梯子を上つて来るなり、小母は、へつたり、斯う云つて頭を下げた。涙が止め途も無く湧いて流れて、重ねて頭を載せた兩方の手の甲を、見る間にビッシヨリ濡らして了つた。

薫は一寸と肩を振るやうにして、

『僕ア愈々おいとまする事に決心しましたから、小母さんすみませんが車を一台雇つて下さい』

『薫さん、あなたは全く如何しても、さうしないぢやならないの？』

小母は涙の顔をあげて怨めしうに、薫の瞳をじつと見据ゑた。

『今度こそ歸ります！』

『如何しても？』

返事をする必要が無いと云つた風に、薫は黙つて唇を噛んだ。小母もせんやうの無い容子に唇を噛

みくした。恐ろしく何彼を考へ込んで居るやうな、そして又途方に暮れて呆然して居るやうな、薫は小母の胸をはかり兼ねた。

『さうだ忘れて居た』

あわたしくカバンを引き寄せると、薫は中から引き抜くやうに、白緋の手織の浴衣を取り出した。

『これをお返し致します』

投げるやうにして、小母の膝近く突きやつた。

『お返しには及びません、お祖母さんが折角織つて差し上げたんですから、お持ちになつて頂戴』

小母の調子は平常と同じにやさしかつた。

『嫌です、僕アもう此處の家と關係ないんだから、貰つた物は皆なお返しします』

『だつて、お祖母さんが折角……』

『嫌だ、嫌だ、誰があんな糞婆なんぞに貰つて行くもんか』

『薫さん！』

小母ははらはらと涙を落した。

『こむね、返して貰うてお呉れい、いらん云はんすものう、押しつけがましい、此方い返して貰ひやんせう、そんげな手織縮でも、私が丹精こらいて造へたんぢやに、大阪ぢや可笑しうて着られんか知らんが、此處いらの者にやつて見い、誰でも喜んで着ようぞい』

思ひ掛けも無い祖母が、梯子段の上り口から首を突き出した。先刻からの様子を立ち聞いて居たの

である。齒の無い口をわな／＼震はせながら、くどく小言臭い調子で云ふのを聞くと、薫は又むら／＼堪へ切れなく胸が煮えくり返つた。

「返さなくつてさ！」

突然浴衣を掴んで放り投げた。

「まあ、餘りな！」

睨むやうに薫を見やつた小母の眼は、怨に光つた。十秒——二十秒、小母はキツとしてまばたき一つしなかつたが、やがて眞蒼な顔を祖母の方へ振り向けた。

「お祖母さん、薫さんが歸るさうですから車を一台、濟みませんが縫子にさう云つて、今直ぐ雇はして下さいませんか？」

「ハイハイ」

祖母は直ぐ下りて行つた。と矢庭に薫の手が飛んで、ビシヤリと激しい音を立てた。

「アッ！」

思はず叫んだ小母は、赤く二筋指の形を残してはれた、左の眼尻をおさえた。

「失敬だよ實に！」

噛みつくやうに怒鳴り捨てたが、傷所をおさえたまゝ、一言の不平を云はず、何時までも押し黙つた小母の態度を見ると、薫は落付きの無い眼を膝に落した。ちよい／＼盗むやうにして容子を窺つた。

「薫さん、全くどうもわざ／＼呼び立て、とんだ失禮ばかりしましたね」

斯う小母から云はれて、薫は只どきまぎ間違つた。斯うした場合、何時もの小母は屹度、薫の前に泣きふしたものである。

「何も彼も皆な私の手落てしたの、年の行かない縫子にまで、云はんでも可い事を云つて聞かせて、小さい相當に彼女も女の子ですから、色んな事を考へて居たやうですが、つまりは私の浅墓から起つた事で、後から又、何彼をよく話して聞かせて、あやまりませう」

云ひさした小母は唇を噛んだ。凄じ程若白めた頬を傳つて流れた涙を、ハンケチで押し拭ふと、直ぐ又言葉を續けた。

「でも今度の事を忘れるまでには、彼女も中々一通りや二通りの苦勞ぢやありませんまい、薫さん、あなたにも濟みませんでしたね、二人とも若過ぎる位若いんですもの、併しあなたは男の事だし、無い縁だと諦めらるんですねえ」

「まだ車は来ませんか？」

薫はいこちになつて急ぎ立てた。

「ドッ、見て来ませうか」

ついと立つた小母の態度は、腹が立つ程落着いて居る。

「都合で歩いても可いです、僕アもう一時も此家に居るのは嫌なんだ」

だが小母はビクリとも顔色を動かさない。

「車が無かつたら、仕方が無いお歩きなさいな」

斯う静かに梯子を下りかけた。と急に又上へ引返して、妙に俯向いた。トントントン荒々しい足音が聞

えたと思ふうち、薫は天神様のやうな美しい顔付の祖父を見かけた。

『何だ云て、こげん急に歸らばるんぢやのし？私ア今婆さんから聞いて、吃驚したがや、大阪と違うて田舎ぢやけんう、不自由にも有らうが、折角来てお呉れたもんぢやけい、もつと泊つて行つたら如何ぢやな、其内にや茄子や南瓜ばつかりも食はしちや置かんけんう、薫さん』

薫は祖父の笑顔を殊更らしい、嫌味なものに思つて見た。

『是非歸らなきやならない事があるさうですから、又來る事にして、歸した方が可いと思ひます』小母は矢張り俯向いたまゝ、顔を擧げようとはしなかつた。

『さうかのし、それでも何ぢや餘り飽氣無いやうな氣がするてやのう』

『もう車はさう云つてあるんでせうか』

『まだぢや、婆さんの話に聞いて、私ア止めといたんぢやが、どうしても歸る云ふ事なら、直ぐ呼ばせましょうがの、如何ぢや、汝からもう一遍とめて見さんせ』

『否、どうしても歸るさうですから』

小母は心持首をかしげて云つた。

『ヤレ！汝ア眼の下ア如何したんぢやのし？甚い事うはれとるがや』

祖父は呆れた眼を瞠つた。

『僕が打つたんです』

勝ち誇つたやうに、薫は癖の肩を振つた。

『何ぢや云て又？』

『癪に障つたから』

『フウム』

呻るやうに云つたまゝ、祖父は二人を見比べた。

それから直ぐ發つて、福山驛まで七里の道を車で飛ばした薫は、八時幾分の上りに乗り込んだ。夏の夜汽車は、三等の列車の中でも案外冷しく、心地よかつた。段々夜が更けるにつれて、今迄賑やかに話し合つた世間話も、何時とは無く途切れ勝ちで、汽車が姫路を通り越した時分から、一人眠り二人眠つて、浴衣着の男も女も座席によつて居眠つた。

薫は所在無さに窓から首を突き出した。降るやうに星が輝いて、眞黒な丘が幾つも幾つも眼の前を飛んで行く。

ガヂヤ、ガヂヤ、ガヂヤ、ガヂヤ。

まるでレールを走る汽車の音響を打ち消すやうに、夥しい蛙の聲が、しつかりなく聞えて來る。

『堪らないナ實に！』

斯うしがんだ顔を引込めた薫は、やがて又窓から外を覗いて、耳を引立てた。

『まるで二階に寝て居るやうだ』

ガヂヤ、ガヂヤ、ガヂヤ、ガヂヤ、蛙は薫が昨夜まで備後の二階で聞き馴れた、それと同じ聲で鳴き続けた。

蛙
鳴
く
聲
終